

中田英寿選手のパスは
「論理的」

三森ゆりか

欧米の言語技術教育で重視されるのは、対象や状況を理性的に論理的に分析し、それに基づいて推論し、その結果を論理的に組み立てて表現することである。人間は言葉を使って思考するので、言語技術教育は単に言葉の教育にとどまらず、日常生活や芸術の鑑賞、スポーツに至るまで、人間の活動全般にわたって大きな影響を与える。

例えばサッカー。ドイツやスペインなど、ヨーロッパでサッカー番組を見ると、アナウンサーは「論理的」を連発する。日本のアナウンサーが「いいところにパスが出ました！」というところを、例えばドイツでは、「今のパスは論理的に有効でした！」というように説明する。トルシエ監督もインタビューの際に頻繁に「論理的」という言葉を使って、戦術についての質問に答えている。つまり、ヨーロッパではサッカーは論理で組み立てるゲームであると認識されているのである。

ところで、果たして日本では、サッカーは知性と論理

を必要とするスポーツだと認識されているのだろうか。

九八年のワールドカップ予選の際、ミッドフィルダーの中田選手がゴール前に蹴り出したボールにフォワードが反応できない場面が度々あった。その度にアナウンサーは、「中田、パスミス！」と絶叫する。ではなぜ、パスミスばかりをしていた中田選手は、ワールドカップ直後、イタリアのクラブに移籍し、欧州の強豪の中にあつてサッカー選手として成功し得たのか。なぜ、「ミス」と説明された彼の判断が欧州のプロの目にとまったのか。それは中田選手の優れた状況分析力と的確な論理的思考に基づくプレイが、高く評価された結果にほかならない。そして残念ながら当時の日本代表チームの中で、中田選手の知性は日の目を見なかった。

「ドリーミング・オブ・アヤックス」というビデオがある。オランダの名門クラブチーム・アヤックスの選手育成システムを紹介するビデオである。ここでは選手に必要な資質として、技術と知性を強調する。アヤックスの選手育成システムは厳格で、技術はもちろん、学業不振も退団勧告の理由になる。選手育成の責任者によれ

ば、ここで育った優秀な選手たちは揃って学業優秀で、知性的だという。学業成績を重視するのは、サッカーが知性のスポーツだと認識されているからだ。オランダではドイツと同じように言語技術を軸とした「論理的に考える」教育が行われている。ビデオには戦術の訓練の場面がある。子供に状況を分析させ、ゴールを決めるという目的のために、どこにパスを通せば論理的に有効か、相手の動き（言語技術でいえば「考え」）を予測してゴールに近づくにはどうすべきか、相手の反撃（同じく「反論」）に備えて先手を打つにはどう動くべきかを考えさせる。それはまさに言語技術の訓練と同様で、「なぜ？」を軸に、最も無駄がなく有効な戦術を論理的に考える訓練である。思考と肉体の両方で自在に論理的に反応ができれば、戦いの場で本領を余すところなく発揮する力を備えることができるであろう。

ヨーロッパで最も人気のあるサッカーでは、状況を瞬時に分析し、論理的な判断を即決してパスを出すことが求められる。じっくりと考えている暇はなく、すべては瞬間的な思考力によって次の展開が決定す

る。ミッドフィルダーはゴールに最適な位置にパスを出し、フォワードは送られてくるパスの位置を論理的に予測し、まさにその場に移動してボールを受ける。一見本能的に見える一連の動作には、実は学業とサッカーの専門教育の中で鍛え抜かれた論理的思考が働いている。格下のチームと対戦した場合、ヨーロッパのチームは見事にパスを縦につなぎ、あっとい間にゴールを襲う。対等な力を持つチーム同士の試合では、推論（予測）の裏をかく駆け引きが見る者を熱狂させる。サッカーが単なる肉体のぶつかり合いではないことを知っている観客は、テレビの前に陣取って「論理的」を連発しながらサッカーに興じる。論理で選手の動きを推測しながら試合を見るから、サッカーを見る楽しみは倍増するのである。

中田選手は「考えることを大切にしてプレイしたい」とインタビューで語っていた。彼はどこで論理的思考力を身につけたのか。先日のコンフェデ杯の決勝戦で、中田選手の抜けた日本チームは横パスを繰り返して、有効な縦パスを出せずに苦しんだ。中田選手に匹敵する論理的思考力を持った選手が現れるのはいつだろう。

（つくは言語技術教育研究所）